



自衛隊レーダー配備検討

沖縄・北大東島に

防衛省が航空自衛隊の移動式警戒管制レーダーを、太平洋上の北大東島（沖縄県北大東村）に配備する検討を進めています。中国軍機が南西諸島周辺での活動を活発化させる

中、日本の警戒監視の「空白地域」（同省幹部）を埋める狙いです。

14日、浜田靖一防衛相は14日の記者会見で、「移動式警戒管制レーダーを配備する有力な候補地として検討している」と明らかにしました。

配備を検討するのは、車載式のレーダーシステムで、30人規模で運用します。北大東村議会が2021年12月に自衛隊誘致の意見書を議決し、防衛省が現在、候補地の環境調査などを実施中。今月

20日、検討状況に関する住民向け説明会を開きます。

中国軍は近年、沖縄・台湾・フィリピンを結ぶ「第1列島線」を越えた太平洋への進出を強化しています。4月には中国の国产空母「山東」が沖縄南方で艦載機の発着艦を約620回実施。6月には中止の爆撃機計4機が共同飛行を行い、沖縄本島と宮古島の間を通過しました。